

特集

子ども部屋の意味を考える

東京学芸大学助教授 深谷和子



ある思い出

その昔、日本では、何割くらいの子どもたちが、子ども部屋や勉強部屋を与えられていたのだろうか。

筆者は昭和20年代に東京の練馬区に住んでいたが、子ども部屋を与えられた時期の記憶はどれも定かでない。小学校に入っても、宿題をやるのは、一茶の間や座敷の片隅だったような気がする。玄関を入ったところには洋間があって、静かで他の部屋と区切られていたのだから、今なら、まずそこを子ども部屋にしようなものだが、客間にされて、年中ほとん

ど人けがなかった。たぶん、父の書齋の役割も果たしていたのだろう。大きな本箱にギッシリ本がつまっていたので、私はこっそりそこに行っては、本を読むのが好きだった。玄関はわりと大きくて、今思えばここもレッドスペースで、昔の家はずいぶんむだな設計をしたものだ。玄関を通ると長い廊下(えん側)があって、和室が3つ続いていた。いずれもふすま1枚で仕切られているだけの部屋で、一番手前はタンスなどが置いてあり、和室の客間の役もした。つぎが寝室に使われており、一番奥の台所に近い和室は、長火鉢を置いた茶の間である。ところが、昭和の初期のこのちっぽけな家には、もう1つ部屋があった。

台所の
ミは3
入れか
部屋か
母に母
とのこ
むろん
で、ミ
小
女中
を取
の中
そろ
が、本
憶か
の本
順の子
に、し
どこ
てい
座
ど
て
か
て
り
に
用
し
て
き
い
ぐ
ま
り
-

台所のとなりの日の当たらない場所に、タタミは3畳だが、1畳分には半分宙に浮いた押入れが取り付けてあるという、妙なちいさな部屋があって、ふだんは使う人がいなかった。母に聞くと「たぶん女中さんの部屋でしょ」とのことだったが、サラリーマンの父には、むろん女中さんをやとうゆとりはなかったので、宝のもちぐされというところだった。

小学校の4年生ぐらいになって、父がその女中部屋を片づけて、天井までの大きな本箱を取り付けてくれたのだ。戦後のきびしい世の中で、新刊書を1冊ずつ本屋へ行って買いそろえる、というようなことはできなかったが、父がどこかの古本屋で、突然山のような本（小学生全集である。ご年輩の方にはご記憶がおありかもしれない）を買ってきて、その本箱にぎっしりつめてくれたのだ。その本を順々にとり出して読むのは、テレビも、他の子どもを喜ばすような娯楽もなかった時代に、大きな楽しみだった。

しかし、といてその女中部屋が、私の「子ども部屋」になったわけではなかった。長いことそれはただ私の「書庫」の役割を果たしていたにすぎなかった。部屋の隅にちいさな座り机が置いてあったのだが、それをほとんど使いもせずに小学校を卒業した。母に聞いてみても、「昔の子は、あんまり勉強もしなかったからねえ。宿題は、お座敷の隅においてあった机でしてたんじゃないの」とはっきりしない答えしか返ってこないのだ。

自分の腰かけ机を備えてもらったのは中学に入ってからで、父が友人の家の引越して不用になったものを、ゆずってもらったものらしい。なにしろ終戦後間もない、物のない時代である。今から思うと、子ども用のチャチでちっぽけな机で、イスもついてはいなかった。イスは父が日曜大工で作ってくれたのだが、グラグラして困った代物だった。しかし、さすがに中学に入ってから、その3畳に置いた机で勉強した。しかし布のカーテンはおろ

か、じゅうたんも、ストーブもなかった。冬は足全体を毛布にくるんで、ふるえながら勉強した。とにかく火鉢とコタツの時代である。その3畳の部屋にもちいさな火鉢を入れてもらったが、ないよりマシという程度の暖房でしかなかった。だから西しか窓のない居住性の悪い部屋には、あまり居たくなくて、茶の間のコタツや日の当たる座敷の机の上など、その都度よさそうな場所を見つけては、ジブシーのように移動していたように思う。

子ども部屋不要論

ご記憶もあろうか。昨年の11月に住宅メーカーが出資して作っている「住まい文化キャンペーン推進委員会」が子ども部屋に関する調査を行って、子ども部屋のあり方について問題提起を行った。それによると今、日本の83%の家が子ども部屋をもっており、「子ども部屋をもつ子どもは▽親とのふれあいが少なく▽物事に熱中しない▽わがまま▽腹痛を訴え易いなど、内向的、消極的、依存的性格になり易い」のだそうである。そのニュースは、あつというまに日本中を駆けめぐり、にわかにも子ども部屋不要論がまき起こった。

「二階の息子、はなれの娘という言葉がある。非行に走りがちな子どもを言うのだそうだ。昔の家なら、こんなことはなかった。たいて



いは、食事の終わったちゃぶ台の上にノートと教科書をひろげて、兄弟一緒に勉強した。そのかたわらで父親が新聞を読み、母親は編み物をしていた。どんなときでも、両親の姿を見ながら（子どもは）育っていったのだ。

（中略）それが、子ども部屋なる個室を作ったばかりに……。個室文化は、両親をとおして学ぶ姿勢や、家族を思いやる心も子どもから奪ってきた」（週刊朝日 83年12月9日号）

しかしこの調査には、データ分析の際に一つの問題点が見いだされる。子ども部屋のある家とない家とを比較して、子どもの不定愁訴の数や、家族の団らん時間の長短を比較しているのだが、今どき子ども部屋を設けない家庭があるとしたら、それはたぶん、極めてせまい（貧しい）家か、家族に病人がいるなどの特殊な状態にある家か、親の教育的関心がうすいとか、とにかく普通と違った条件をもった少数例なのではなかろうか。とすると、ただ単に、子ども部屋の有無だけでなく、その背景となる条件が違って、それがそれぞれのサンプルの数字の違いになって表れてきている可能性が考えられる。こうした調査



のデータの処理は、よほど慎重でなければならぬだろう。

昔と今の暮らしの違い

さてそのレポートに誘発されて出てきた子ども部屋不要論だが、冒頭に掲げた筆者の子ども時代に戻って考えてみよう。もしあの間取りのままに現在、筆者が小学生だったらどうだろうか。親としては、子ども部屋をどうしたのだろうか。

おそらく、小学校入学と同時に、あの日当たりの悪い女中部屋が、デスクと本棚と共に私の勉強部屋とされ、私もそれを使っただろう。さらに私の中学入学後は、弟がその部屋を引き継ぎ、私の勉強部屋は、たぶん家中で一番上等の洋間に移ったのではなかろうか。外側から見れば過保護に思えるかもしれないが、そうではないだろう。それをするだけの理由と必然性が、一家四人の暮らしの中に生まれてきているからである。

その理由とは、つぎのようなものだろう。当時と現在の子どもの暮らしには、大きな違いがある。①ひとつはテレビ。②もうひとつは昔より子どもたちが家に帰って勉強する時間がはるかに長くなったこと。③また本やおモチャやスポーツ用品などをたくさんもつようになったこと。最後に④夜ふかし型になったこと（筆者の小学生時代は、夜の8時には床に入るのが、子どもの一般的な姿だった）。

あの家にテレビを置くとしたら、茶の間だったろうが、それでは、3つ続いた日本間のふすまや障子を通して、家中にテレビが聞こえてしまう。とても落ちついて宿題をしてはいられなかっただろう。とにかくテレビの面白さは、昔のラジオの比ではないのだから。さもないと、家族全体が子どもの犠牲になって、テレビを見ずにすごすより仕方がなくなる。80歳を越えて今なお熱狂的な巨人ファ

ンであ
ば、そ
い。し
レビを
暮らし
も勉強
起きて
い。も
う勉強
どもた
や座敷
ってし
だ。

そ
せま
暮らし
ば、
もが
する
する
題程
その
ナ
もま
者防
って
成件
様

許
ま
し
た
ら
っ

ばな
こ子
り子
り間
らど
う
1当
に
ろ
屋
外
が、
由
れ
。
き
ひ
す
本
も
に
時
っ
こ
間
用
こ
り
ら
ど
。

ンである父は、その当時だって、テレビがあれば、それを何よりの楽しみにしたにちがいない。しかし、子どもが成長する間、ずっとテレビを見ずにすごすなど、そんな非人間的な暮らしを親に強いていいものだろうか。しかも勉強時間は長くなり、子どもは夜遅くまで起きている。それに親がつき合えるはずもない。むろん、子どもに勉強するとか、ナガラ勉強をせよとは言えないのである。また子どもたちのもっている本やおモチャを、居間や座敷に置かれたのでは、おとなのほうで参ってしまう。そうじも大変だし、片づけも大変だ。

そう考えてくると、とくに我が国のようにせまい家々では、おとなの暮らしと子どもの暮らしを、部屋を分けることで別にしなければ、とうてい暮らしていけそうもない。子どもがちゃぶ台で宿題を（せいぜい30-40分）するかたわら、父が新聞を読み、母が編み物をする図は、テレビのなかった時代、勉強も宿題程度ですんでいた古きよき時代のもので、それを現代にあてはめようとする事自体がナンセンスなのではなかろうか。いわば子ども部屋を与えるのは、相互に利益の相反する者（おとなと子ども）たちの、ある種の生活防衛のためともいえそうである。おとなにとって家庭はいこいの場であり、成長の場としての意味は少ないが、子どもにとって家庭は、成長の場としても重要な場であるという、条件の違いがある。むろん、どちらの暮らしが犠牲になるのも、望ましいことではない。

とすると、かりに筆者が家中で一番上等の洋間を子ども部屋にと与えられたとしても、それは決して子どもへの甘やかしや過保護とはいえないだろう。それはウサギ小屋日本の親たちの一つの生活の知恵かもしれない。本当は、日本中の家の部屋数が、今の2倍か3倍ならば、子ども部屋などというものを設けなくても、それぞれが十分に快適な暮らしをしていけるはずなのだが。



大切なのは

とすると子ども部屋不要論は、昔と今で子どもや親たちの暮らしが変わってきていることを忘れた、単なる郷愁からのものということになりそうだ。

大切なのは、子どもが子ども部屋以外で過ごす時間が、いかに子どもにとって充実したものであるか、つまり子どもの心身の発達に寄与するような時間があるか、だろう。外においては、仲間との楽しい遊びの時間があり、家庭の中では、1人でいるよりも家族と過ごす時間が、子どもにとって生き生きとした楽しいものであるような暮らしがあれば、むしろ子ども部屋をもつことが、逆に、集団に依存しすぎず、自分の中に「個」を作り出し、子どもの内的世界を充実させる上で大切な役割を果たすだろう。さらに子どもがこのちいさな世界を自分で統治する力を養うことができれば、それは成長するにしたがって、もっと広い世界で力をふるう能力をもつことにもつながっていくだろう。

そのためには、子ども部屋を与えたあとで、子どもにそれをどう使わせるか、このスペースを子どもにどう管理させるか、それが大切なカギになってくるだろう。

調査レポート／子ども部屋

東京学芸大学助教授 深谷和子

茨城県守谷町立大井沢小学校講師 塚本恵美子

要約

① 子ども部屋をもっている子ども

子ども部屋をもっている子どもは、全体の85%にも達する。しかし個室をもつのは、その中の3割ほどで、多くは2人か3人での相部屋が一般的な姿である(図1)。また、部屋の広さも6畳とせまい(図6)。



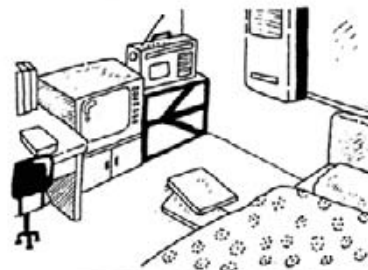
② 子ども部屋を与えられる時期



一般的には小学校に入ったころから与えるケースが多くて、48%。その後与える場合も24%で、思ったより早くからは、与えていない(図9)。

③ 子ども部屋にあるもの

クーラー29%、セントラルヒーティング10%、ラジカセ34%、ベッド45%、ステレオ12%、テレビ20%、顕微鏡14%、ピアノ8%、となかなかのものである(図16、図17、図18)。



④ 密室性の低い子ども部屋

カギのかかる部屋は、わずか19%。
子どももあまりカギのかかることを望んでいない。場所は、父母の部屋、居間、きょうだいの部屋に隣接し、テレビや家族の話し声もわりとよく入ってくる。ノックをせず子ども部屋に入る親も8割(図21、図22、図20、図23、図37)。



⑤ 子ども部屋にはいない



子ども部屋を与えられても、思ったより子どもはそこにいないし、勉強もしていない(図26、図27)。

⑥ そうじは他人まかせ

せっかく与えられた子ども部屋だが、必ず自分(子どもたち)でそうじするのはわずか9%。「たいてい子どもがする」を合わせても3分の1でしかない(図31)。



テイ
ド45
、顕
なか
8)。

サンプル数 (人)

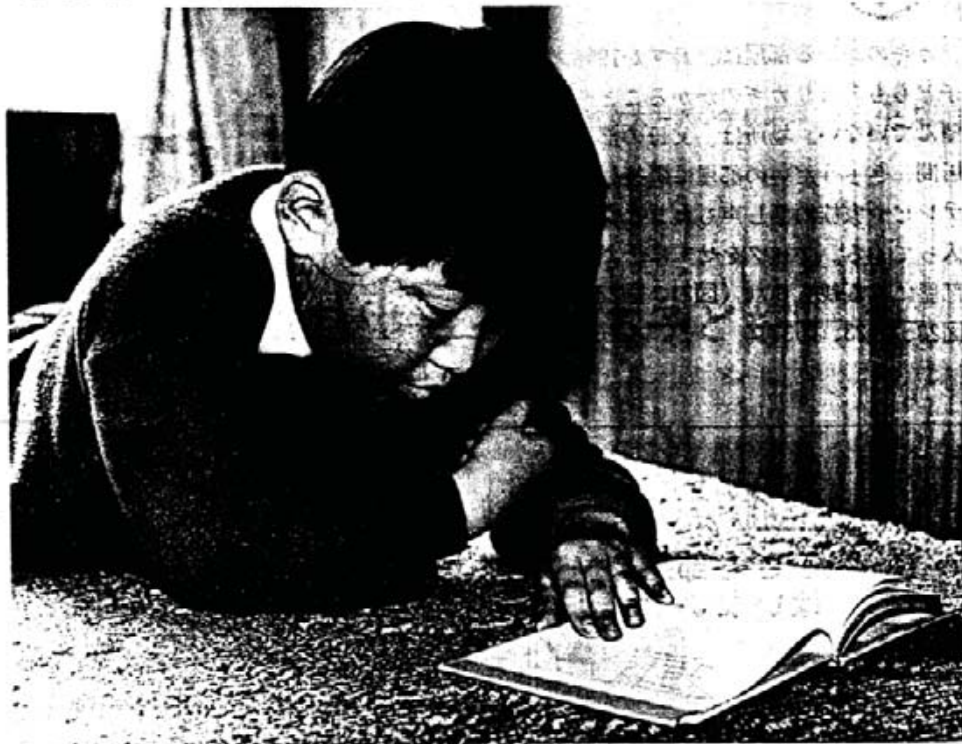
学年/性	男子	女子	計
4年	284	271	555
5年	251	267	518
6年	303	258	561
計	838	796	1,634

調査概要

対象●東京・千葉・埼玉・茨城の
小学4・5・6年生
期間●昭和58年10月
方法●学校通しによる質問紙調査

Wacoal

1. 子ども部屋をもつ子の割合



個室か相部屋か

子ども部屋は、子どもの「城」である。一歩この部屋に入ると、子どもたちは親の目からのがれて、自由にふるまうことができる。おとなたちが自分の家をもちたいと思うように、子どもたちがこの城をもちたいと願うのは当然だろう。では現実には、どれぐらいの子どもたちが、自分の部屋をもっているのだろうか。

まず図1は、自分の（またはきょうだいと一緒に）子ども部屋をもっているか、もっている子どもは「何人でその部屋を使っているか」をたずねた結果である。

図が示すように、「もっている」と答えた子どもが85%。ほとんどの子どもが、子ども部屋をもっていることがわかる。また、巻末の集計表を見ると、男子の所有率が女子よりやや多く、学年との関連では、学年が上がるに

つれ、少しずつ所有率は増えている。

それでは、子ども部屋をもつ85%の子どもたちは、何人でその部屋を使っているのだろうか。

引き続いて図1を見ると、部屋をもっている子どもの中で、ひとり部屋をもつ子どもが31%、きょうだいと2人の部屋をもつ子どもが44%、3人以上の部屋をもつ子どもが9%。個室をもつ子どもは、全体の中で3割でしかない。とはいっても、うさぎ小屋といわれている日本の住宅事情からすると、かなり十分に子どもたちは優遇されているといえそうだ。

つぎに、家庭環境と子ども部屋の所有状況の関連を見てみよう。

図2は、家族の人数との関連である。子ども部屋をもっている割合は、7人以上の大家

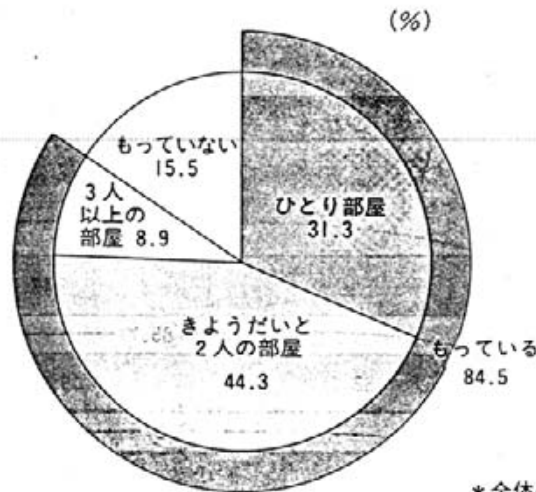
族になるとやや下がるものの、全体としては、家族数にかかわらず、とにかくどの家でも、子ども部屋を1つは確保しているようである。

つぎに、家の職業との関連では、図3に示したように、工場経営90%、サラリーマン86%、商店84%と、所有率にそれほど差がない。

しかし、個室をもつ割合を見ると、他に比べて商店を経営する家庭で25%と、急に割合が下がる。商店の場合、店と住居が一緒の家が多く、居住条件が、他よりも多少悪くなっているのだろう。

また図4は、家の形態との関連である。子

図1・子ども部屋の有無と個室かどうか*



*全体のサンプルのデータ

図2・家族の人数×子ども部屋の有無

家族の人数	もっている (%)	もっていない (%)
2人	54.5	45.5
3人	79.3	20.7
4人	85.6	14.4
5人	88.2	11.8
6人	84.0	16.0
7人以上	69.4	30.6

ども部屋の有無は、庭のある一戸建てで87%、3階建て以上のマンション86%と差がないが、これに対して、(2階建ての)アパートになると61%と、かなり所有率が下がる。同様に、個室の割合も、アパートになると13%と一段と少なくなる。

このように、住宅事情はさまざまであっても、とにかく85%の子どもは、わが家の中に、子どもの城をもっている。

しかし、わずかではあるが、城をもたない

15%の子どもたちは、どんな部屋を子ども部屋がわりに使っているのだろうか。「勉強机や学用品などを置いてある部屋」を聞いたのが図5である。

居間に置いている子どもが5割弱、父母の寝室に置いている子どもが3割弱。居間は、家族だんらんのための部屋であり、家中で人の出入りの最も多い場所である。子ども部屋をもたない子どもの多くは、雑然とした中で、学習したり自分の時間を過ごしているようだ。

図3・家の職業×子ども部屋の有無

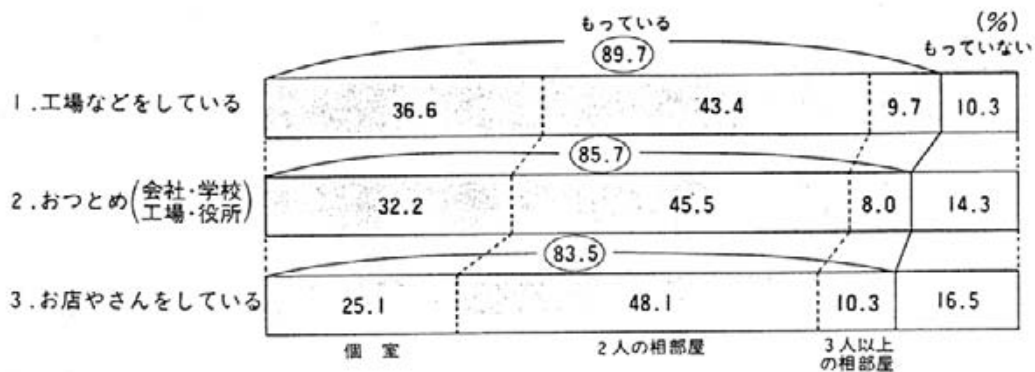
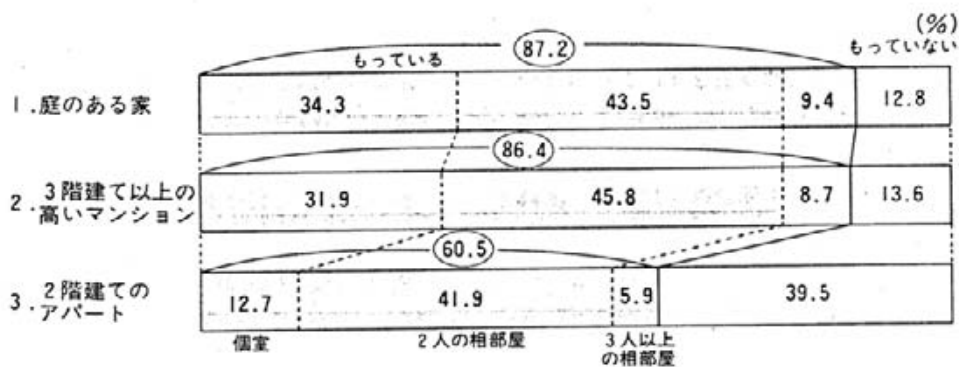


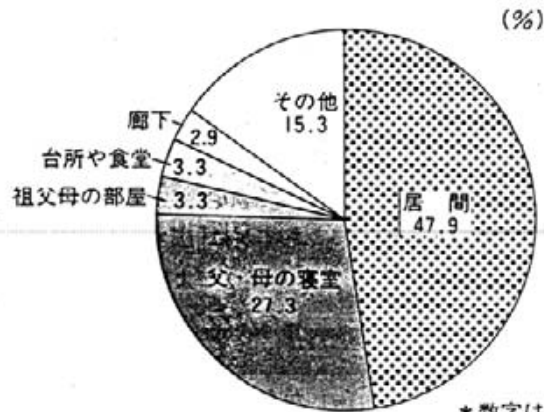
図4・家の形態×子ども部屋の有無



さて、全体としての子ども部屋の所有率・使用状況を見てきたわけだが、つぎに子ども部屋の様子をもう少し詳細に追ってみよう。

以後のデータは、すべて、子ども部屋をもつと答えた85% (1272名) の子どもたちの結果である。

図5・勉強机や用具などのある部屋*



* 数字は無答分を除く割合

子ども部屋の広さ

まず図6は、「子ども部屋の広さ」を聞いた結果である。6畳ぐらいと答えた子どもが44%で、それより広い子どもは16%しかない。日本の住宅事情で子どものために用意できるのは、6畳がせいっぱいというところか。

では、使用している人数と広さとの関係はどうだろう。図7がそれを示す（ただし図7は、図6でわからないと答えた16%を除いて集計してある）。これを見ると、個室であろうと、2人以上の相部屋であろうと、部屋の大きさはそれほど変わっていない。子どもが何人であろうと、やっぱり6畳ということは、ちょっぴり悲しい現実である。中には、3人以上で4.5畳以下の部屋を使っている子どもも26%と、かなりの割合にのぼる。

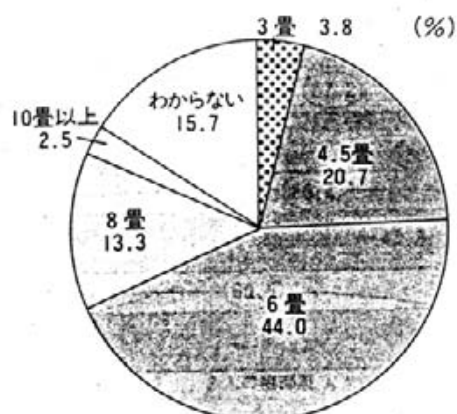
日本の場合、子ども部屋の所有率は確かに高いかもしれないが、広さという点では、欧米諸国と比べるとかなり悪い条件下にあるか

もしれない。

それでは、実際に部屋を使っている子どもたちは、今の部屋の広さに満足しているのだろうか。図8を見ると、「もっとずっと」「もう少し」広いほうがよい、を合わせた不満組は、全体の6割。子どもたちは、今の広さに決して満足はしていないようである。しかし、さすがに「広すぎる」と答えた者は少ないが、「ちょうどよい」が4割弱。住めば都というところだろう。

さて、次の図9は、子ども部屋をいつごろから与えられていたかを示したものである。「小学校に入ったところから」48%、「ごく最近」24%。かなりの子どもは、小学校入学を機会に部屋を与えられるものようである。小学校入学を機会に、「独立心」を育てようとするのか。それとも「勉強してほしい」と願うのか。期待にみちた微妙な親心があるに違いない。

図6・部屋の広さ*



* これ以後のデータは
子ども部屋をもつ者の数字

図7・部屋の広さ×個室かどうか

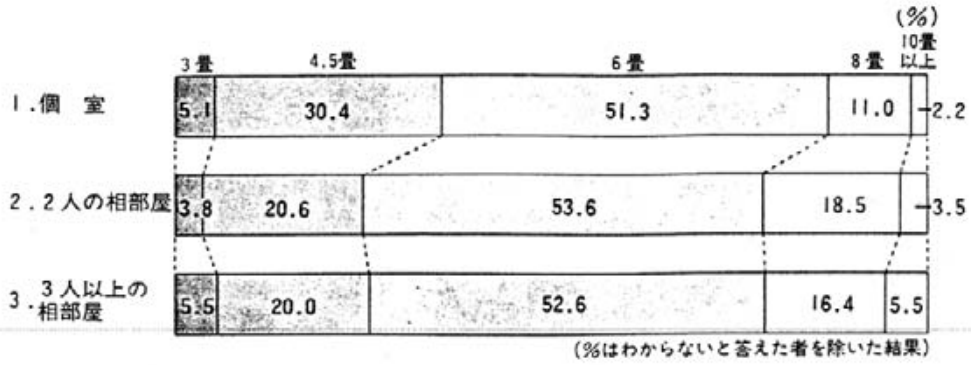


図8・今の部屋の広さに満足しているか

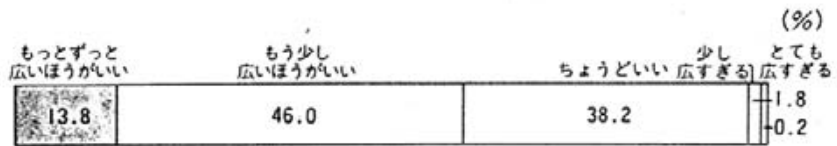
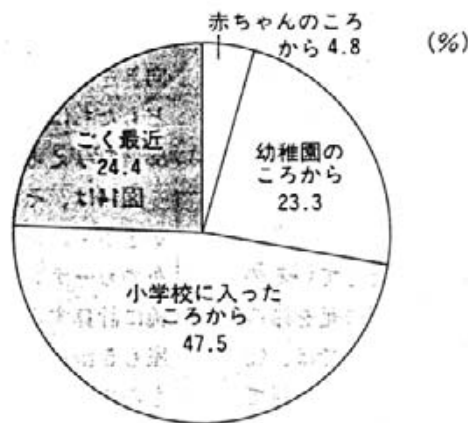


図9・子ども部屋をいつごろからもっていたか



2. 子ども部屋の風景



部屋のインテリア

さてせまいながらも子どもたちの城は、どんなふうにしつらえられているのだろうか。むしろそこでは勉強もしなければならぬが、子どもたちは何よりも自分の心理的空間を作り出すことを願っているのではなかろうか。そこに子どもは何を置き、どんなふうにかざることによって自分の城を創り上げようとしているのか。もう一步、子どもたちの部屋に足を踏み入れてみることにしよう。まずここでは、物理的な面から、子どもをとり囲む環境を見ていくことにする。

まず図10は、和室か洋室かをたずねたものである。和室が56%に対し、洋室が44%と、和室のほうが少し多い。

次に図11は、窓の有無を示している。98%の部屋に窓がある。またその数は、図12に示

すように、1か所か2か所で、さらに、その向きを図13で見ると、南向きが43%。子どもたちは、家の中でも、かなり良い条件の部屋を与えられていることがわかる。

図14は、その窓にカーテンがかかっているかを示す。レースのかかっている部屋は70%。布のカーテンのかかっている部屋が76%。単純に計算すると、ダブルカーテンの子ども部屋も5割近くはあることになる。ぜいたくなものである。

参考までに、カーテンの色をたずねた結果を、表1に挙げてみた。緑・オレンジといった、比較的明るい色が多いことがわかる。

窓からもう少し下のほうに目を移してみよう。

図15は、じゅうたんまたはカーペットが部

図10・和室か洋室か

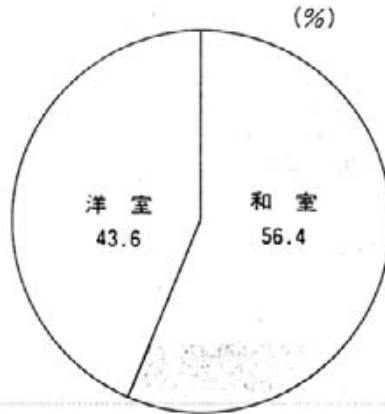
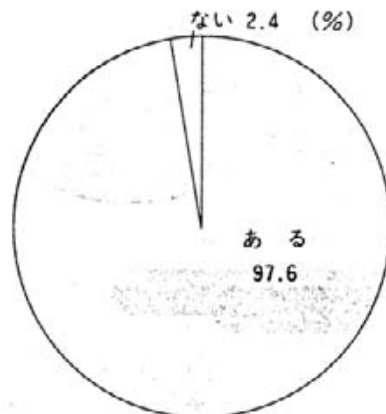


図11・窓の有無



「ある」と答えた者だけ

図13・窓の方角

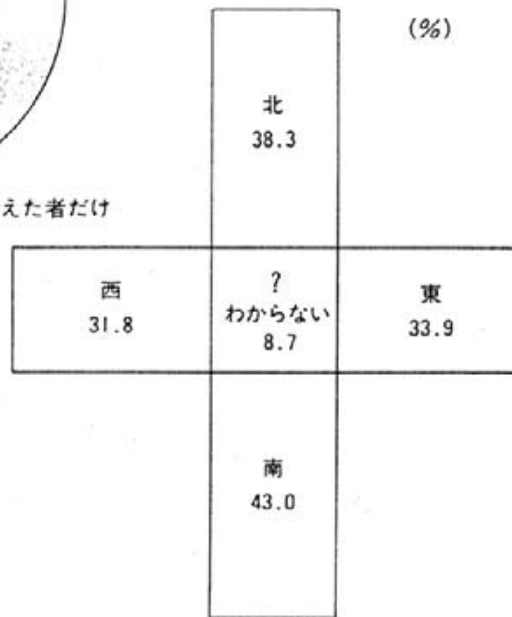


図12・窓の数



屋に敷いてあるかを聞いたものである。75%が「ある」と答えている。また、その色調は、表2に示すように、カーテン同様「緑」がトップで、以下も明るい色が多く使われていることがわかる。

このように、子ども部屋には和室が多いとはいえ、ほとんどの部屋に窓があり、窓には布やレースのカーテンがかかり、床（畳の上にも）には、じゅうたん・カーペットが敷か

れている。つまり、昔ながらの和室とは違い、畳部屋であっても、洋室と同じように使われていることがわかる。しかも、カーテンやじゅうたんの色もグリーンを中心とした明るいものが多い。子どもたちの部屋をせいいっぱい、子どもの気に入るようなものにしようと、こまごまと心を配っている親たちの姿が目につかってくる。

さて、図16は、部屋の冷暖房の設備状況を

図14・カーテン

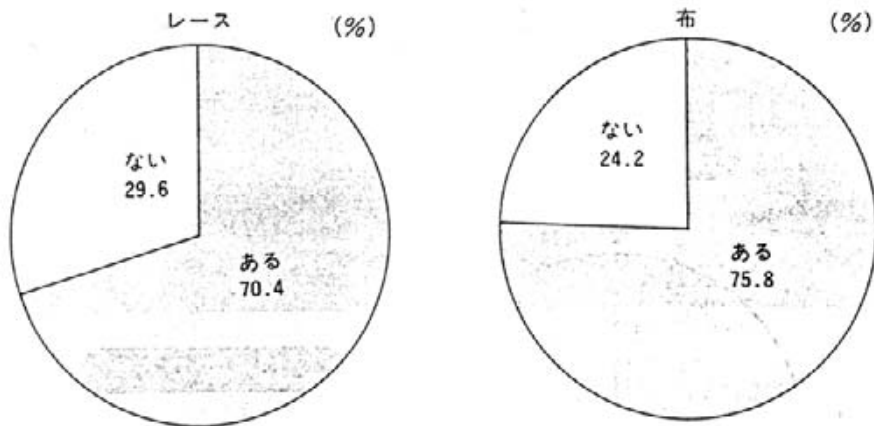


表1・カーテンの色

男 子		女 子	
1	緑 (22.8)	1	緑 (16.8)
2	茶 (13.7)	2	ピンク (15.9)
3	オレンジ (13.1)	3	オレンジ (14.2)
4	青 (10.5)	4	青 (11.6)
5	赤 (4.3)	5	茶 (8.7)

()内は答えた者の中の割合で、チェックなど柄物は除いてある。

まとめたものである。夏の冷房の主流は扇風機で、8割の子ども部屋で使われている。しかし、クーラーの入っているゼイタクな子ども部屋も3割近く。親心とはいえ、ちょっと考えさせられる数字である。しかし、これが受験生の部屋となると、もっともっと割合は高くなるのかもしれない。

では、冬の暖房はどうなっているのだろうか。1位は電気こたつで39%。これに続くのが、

石油ストーブの36%、電気ストーブの32%である。セントラルヒーティングの入っている部屋も10%近くある。しかし、夏のクーラーの普及率に比べたら低いものの、ホットカーペットという新顔もすでに1割近く入っている。危険でないように、しかも暖かく、という親心がここにもものぞいている感じがする。

図15・じゅうたん・カーペット

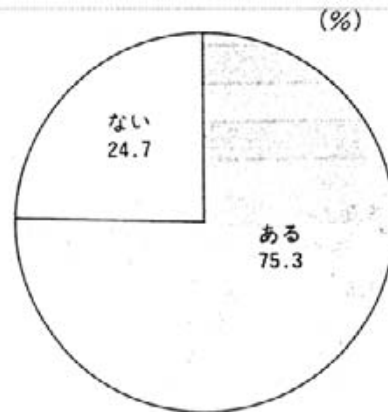
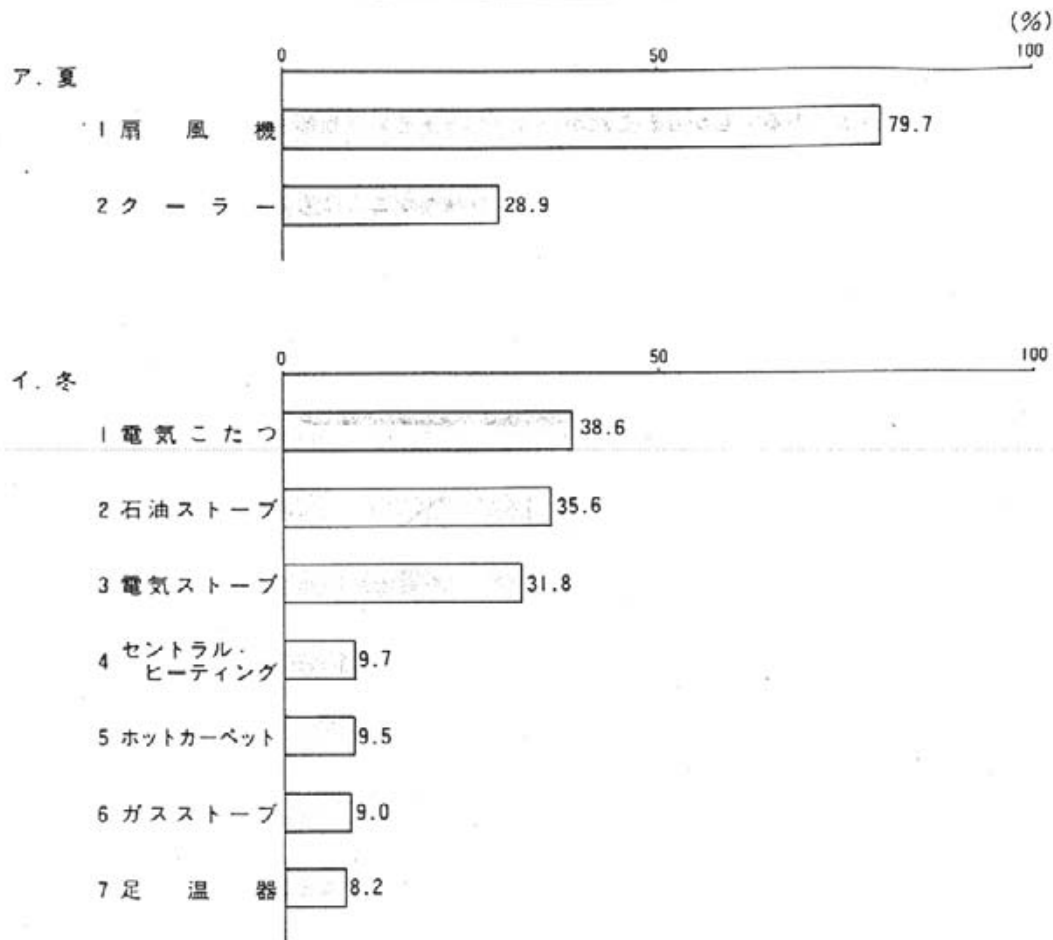


表2・じゅうたん・カーペットの色

男 子			女 子		
1	緑	(31.5)	1	緑	(19.8)
2	オレンジ	(12.8)	2	ピンク	(16.7)
3	青	(10.3)	3	オレンジ	(14.1)
4	グ レ ー	(8.9)	4	赤	(7.1)
5	黄	(5.8)	5	茶	(5.9)

()内は答えた者の中の割合で、チェックなど柄物は除いてある。

図16・夏・冬の冷暖房



子ども部屋に置いてあるもの

もう少し詳しく、部屋の中の様子を観察してみることにしよう。子ども部屋には、どんなものがあるのだろうか。図17にそれを示した。

上位に並ぶのは、当然のことながら、「勉強机」「いす」「ごみ箱」「鉛筆削り」など勉強道具で、いずれも9割を超えている。その他、目につくものをいくつか拾ってみよう。

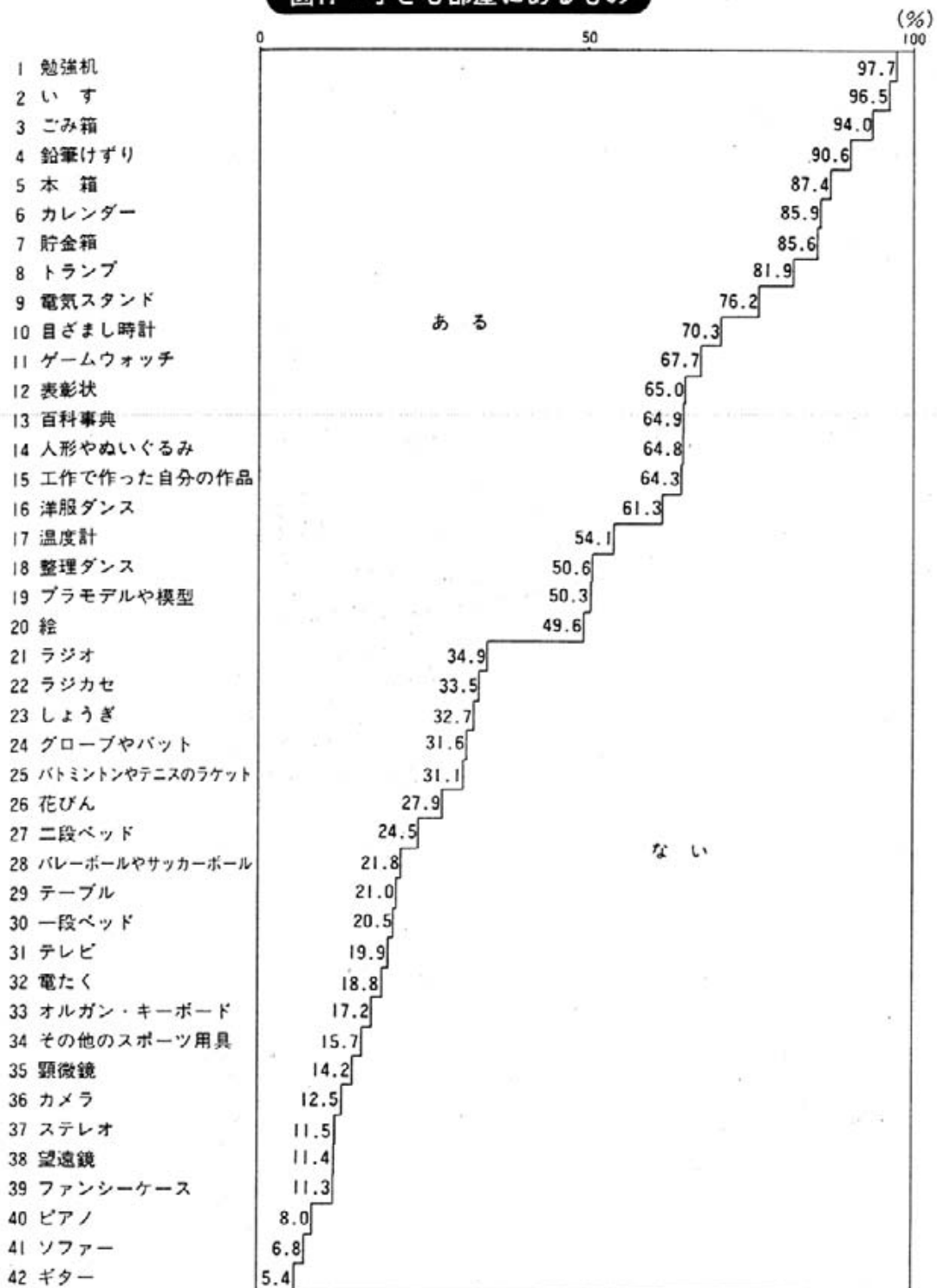
まずベッドだが、二段ベッドが25%、ふつうのベッドが21%。合わせると、半分近くの子供がベッドで寝ている。ラジオが35%、

ラジカセが34%で、合わせて7割近く。ステレオも、12%の子ども部屋に置いてある。

驚いたことに、テレビが20%。いったいこれで子どもに「テレビを見すぎてはいけません」と言えるのだろうか。子どもにせがまれてのことかもしれないし、中古のものなのかもしれないが、とにかく、現代の親の甘さがあらわれている感じである。

しかも先に見てきたように、子ども部屋の主流は6畳。そのせまい中に、ずいぶんといろいろのものが、雑多に詰め込まれている感

図17・子ども部屋にあるもの

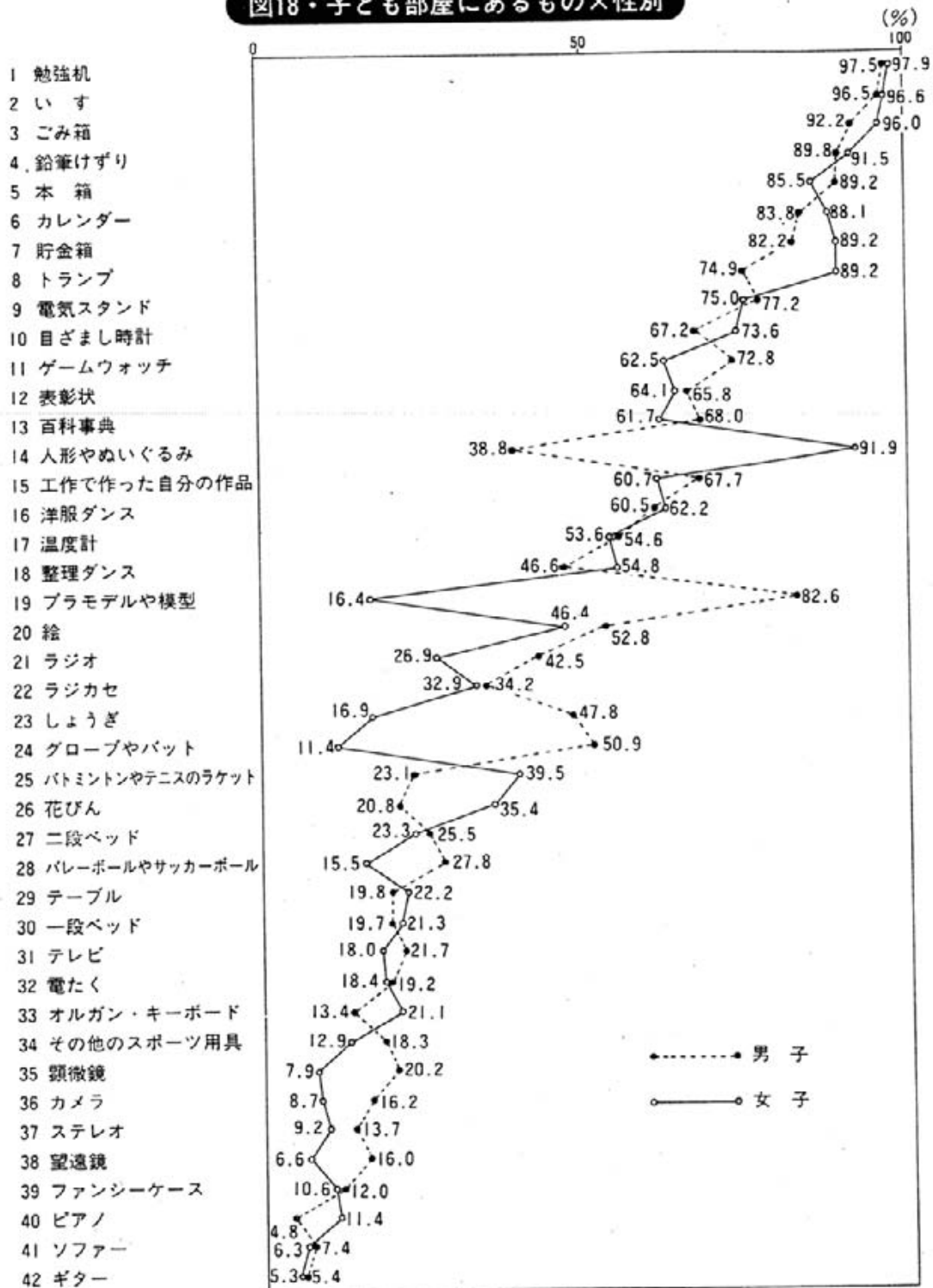


じである。豊かな時代の子どもたちが、あふれる品物の中で、どうしたら自分を見失わずに暮らせるか。むずかしいことではなからう

か。

つぎに図18は、子ども部屋に置かれているものと性別との関連を見たものだ。⑬人形、⑭

図18・子ども部屋にあるもの×性別



プラモデルなどの装飾物、②③しょうぎ、②④グローブなどの遊具に当然のことながら性差が見られる。②①ラジオ、③⑤顕微鏡、③⑥カメラなど

メカ類も、男子の部屋のほうに多く見られるようである。しかし、全体としては、思ったほどの差が見られない。

子ども部屋にほしいもの

さて、このように恵まれた子どもたちの部屋ではあるが、今以上にほしいものがあるのだろうか。その結果をまとめたものが、表3である。

表3・部屋に、今、一番ほしいもの(1位~10位)

(男子)		(女子)			
1. テレビ		1. テレビ			
2. ステレオ		2. ベッド			
3. マイコン(パソコン)		3. ステレオ			
4. ベッド		4. めいぐるみ			
5. こたつ		5. ピアノ			
6. ビデオ		6. ソファ			
7. ポスター		7. ラジカセ			
8. ラジコン		8. スターのポスター			
9. プラモデル		9. ひとり部屋			
10. クーラー		10. 電話			
〈その他〉(順不同)		〈その他〉(順不同)			
本	鏡	整理ダンス	温度計	ラジオ	絵
本箱	テレビゲーム	じゅうたん	トランペット	ベット	スノービーのもの
ラジカセ	扇風機	カメラ	テーブル	お金	ラジコン
二段ベッド	整理棚	サイン	時計	本箱	オルガン
絵	ソファ	洋服ダンス	カメラ	洋服	電卓
蛍光灯	キーボード	エレクトーン	カーテン	プラモデル	イス
百科事典	レコード	くつ	棚	ゲームウォッチ	クッション
日本の歴史	カーテン	ホットカーペット	タンス	かご	ローラースケート
魚たく	インテリア	ふとん	望遠鏡	鉛筆	花びん
冷蔵庫	ゲームウォッチ	マイコンのプリンター	じゅうたん	目ざまし時計	
おもちゃ	顕微鏡	ピアノ	二段ベッド	こたつ	
巨人の帽子	動物のポスター	ファンシーケース	百科事典	本	
サインボール	オートバイのポスター	ビートルズのレコード	旧約聖書	マンガ	
ピストル	アニメのポスター	バイクのポスター	電気スタンド	人形	
電卓	探検地図	ワープロ	インテリア	グランドピアノ	
時計	お金	テーブル	押し入れ	テレビゲーム	
ベット	釣りのポスター	パソコンのカセット	マイコン(パソコン)	顕微鏡	
釣り道具	日本地図	外国のサッカー	机	図鑑	
プレーヤー	世界地図	チームのユニホーム	犬の写真	キーボード	
電話	サッカーのポスター	カセットテープ	ファンシーケース	エレキ	
ベナント	船の模型	すぐ眠れる枕	エレクトーン	扇風機	
ギター	グローブ	よく切れる小刀	ハムスター	ストーブ	
天体望遠鏡	バット	工作道具	フルーツ	セントラルヒーティング	
望遠鏡	机	天体の本	ミシン	カレンダー	
セントラルヒーティング	イス	ミニコンポ	ドレッサー	額に入った自分の絵	
ストーブ	ゲーム	広辞苑	クーラー	世界中の	
外国の装飾品	ウォークマン	野金箱	暖房	ピアノの楽譜	
ひとり部屋	地球儀	サンドバッグ	ウォークマン	織大輔のカレンダー	
広い部屋	プロレスラーの下敷		エアコン	部屋の広さ	
鳩時計	プラモ入れ		プレーヤー	ミッキー・マウスの毛布	
スタンハンセンの	マンガ		ぬり絵	ビデオ	
LPレコード	ぬいぐるみ		サイン	ホットカーペット	

男女とも、ほしいものの1位はテレビである。先の結果で、子どもたちの2割がテレビをもっているのに驚かされたが、その上さらに子どもたちがほしがっているものの1位もテレビ。テレビ時代の子どもたちの名にふさわしい結果ではあるが、こうした子どもたちの声にひきずられて、何年かしたら、子ども部屋へのテレビの侵入率は、また一段と上がっているのではないか。親たちによほどの強い意志を望みたいところである。

また、表3によれば、多少の性差はあるものの、ほしがられているものが全体としては

かなりの高額商品であることも、気になる結果のひとつである。男子についていえば、千円単位で買えるのは「ポスター」と「プラモデル」、女子については、「ぬいぐるみ」「ポスター」の2つだけで、他はいずれも数万円から10数万円、またはそれ以上の高額商品ばかりである。表の下部に掲げてある11位以下のものも、「子どもらしい」品物がほとんど見当たらないことがわかる。かりにおとなに調査した場合と、内容はほとんど同じなのではないだろうか。

子ども部屋の壁には

つぎに、壁のほうに目を移してみることにしよう。どんなものがはってあるのだろうか。図19によれば、まず1位はスターのポスターや写真で43%。小学校上学年の子ども部屋は、もう思春期のそれと同じ雰囲気をもつものになってきているようである。2位のマンガ、3位のペナント、いずれもそうした自分の城づくりがうかがえて、ほほえましい限りである。ただし、勉強に関するものも、テラホラと見える。日本地図、漢字表、世界地図、勉強の計画表、生活時間表、歴史年表……。いずれも勉強熱心な日本の子どもたちにふさわしい光景である。

さて、そうした壁にはられているものの中にも、「座右の銘」に近いものがあるのではないか。日本の教室にだって、たいてい何かの言葉がはられているのがふつうである。モーツァルトの子孫たちは、おそらく自分の城に

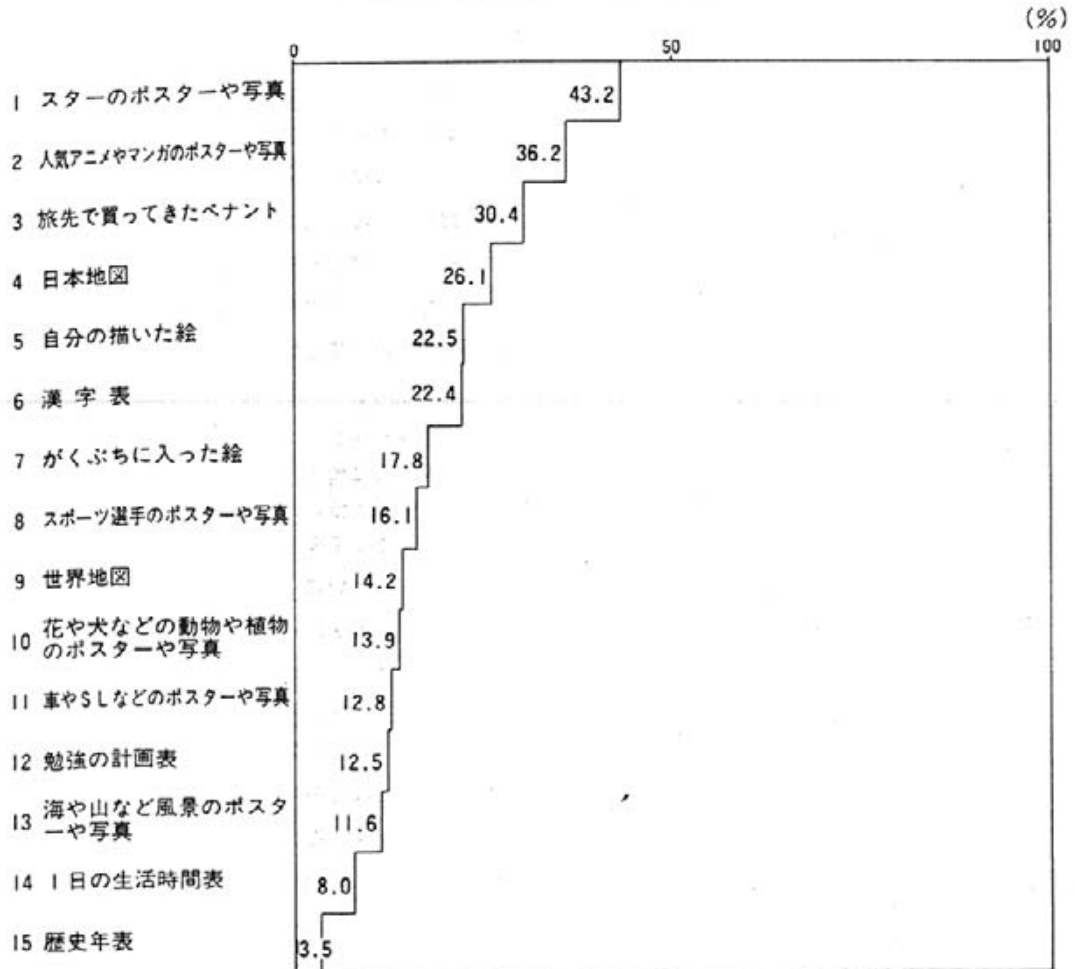
も、何かのスローガンをもち込んでいるに違いないのである。

表4・表5は、壁にはってあるものの中でも、自分の目標や好きな言葉など、自分で書いてはったものを聞いて、まとめたものである。

まず表4は、自分の「目標」として、はってある言葉である。実にたくさんの決意表明の文章が並んでいる。これを見る限り、日本の将来は、次世代も安泰だろうという気がしてくる。欧米の子どもたちの場合はいったいどうなのだろう。何かの機会に見てみたい気がする。

いっぽう、表5の好きな言葉のほうを見ると、いくつかおもしろい言葉が書かれている。たとえば、男子で、「SPECTER」「死喰魔」などは、暴走族グループの名前であろうか。また、「命」「神風」など、子どもらしからぬ言

図19・壁にはってあるもの



葉も並んでいて、なにか不気味な感じがする。

また、「めざせ成蹊」「桐朋・慶応」「打倒沼崎」など、自分の志望校やライバルを、目標ではなく好きな言葉としてあげている子ども

もいる。「SPECTER」とは別の意味で、やはりコワイ感じがしてくるのだ。

結千モスかかの見調は

違

で書あ

っ

明本

しい

気

と、

な

ま

言

表4・子ども部屋にはってあるもの

自 分 の 目 標

<男子>

- ・自分のことは自分でやろう
- ・勉強をがんばる(2名)
- ・ピアノをがんばる
- ・学校を1日も休まない
- ・マラソンの目標
- ・おこられないようにする
- ・忘れものをしない(2名)
- ・友だちと仲よくする
- ・早寝早起き
- ・算数の成績を上げる
- ・1日2時間勉強する
- ・必勝
- ・予習・復習をする
- ・返事をしっかりする
- ・約束は必ず守る
- ・集中努力
- ・何事にも集中しよう
- ・物事をやる時にも、頭と知恵を使って
- ・先のことを考える
- ・机をきれいにしよう
- ・何事もあきらめな
- ・毎日勉強する
- ・むだ使いをしない
- ・お金ためろ、ハングラム買え、むだ使いやめろ
- ・玉ねぎを食べる

<女子>

- ・根性強く
- ・何ごとにも全力で
- ・ふざけずにやる
- ・むだ使いするな、あるものは買うな
- ・1日2時間勉強する(2名)
- ・生活をきちんとする
- ・そろばんが1級になるようがんばる
- ・絶対に漢字プリントを忘れない
- ・ $\left(\begin{array}{l} \text{ひふをかかない} \\ \text{11時までねる} \\ \text{1日3回手伝いをする} \\ \text{毎日そうじする} \end{array} \right)$
- ・言葉をていねいに
- ・読書の秋、本を読んだら一言でもいいから感想を書こう
- ・勉強をがんばる(2名)
- ・自分から進んで勉強する(2名)
- ・自分のことは自分でやる
- ・全科目をがんばる
- ・たくさんの本を読む
- ・1回読んで2回書く
- ・姿勢正しく(2名)
- ・きょうだいのきまり
- ・予習・復習をする(2名)
- ・買い物に進んで行く
- ・算数をがんばる
- ・研究をする
- ・字をきれいに書く
- ・声を大きく
- ・社会をがんばる
- ・ピアノをがんばって音楽の先生になる
- ・何でも最後までやりとげる

表5・子ども部屋にはってあるもの

自分の好きな言葉

〈男子〉

- ・飛しょう
- ・いつも元気
- ・がんばる
- ・プラモデル
- ・友情
- ・日記
- ・命
- ・神風
- ・根性(2名)
- ・SPECTER
- ・死喰魔
- ・ウォークマン(英語で)
- ・忍耐
- ・希望
- ・打倒沼崎
- ・めざせ成蹊
- ・桐朋・慶応
- ・プラモデルを買う
- ・鳴かぬなら殺してしまえほととぎす
鳴かぬなら鳴かしてみようほととぎす
鳴かぬなら鳴くまでまとうほととぎす
- ・良い本読めば、やさしい気持ちが心にたまる
- ・夕日・雲

〈女子〉

- ・風
- ・やさしくね、やさしくね、やさしいことは強いよ(宮城まり子)
- ・希望
- ・必勝(4名)
- ・花
- ・美しく
- ・根性・忍耐・希望
- ・愛
- ・智也命
- ・男の子が大好き
- ・健康第一
- ・努力・根性
- ・若島津
- ・人気物になる
- ・なめんなよ
- ・人は情

子ども部屋の独立性

部屋の中のようにすがたいぶ明らかになってきたところで、部屋の周囲に目を向けて見ることにしよう。

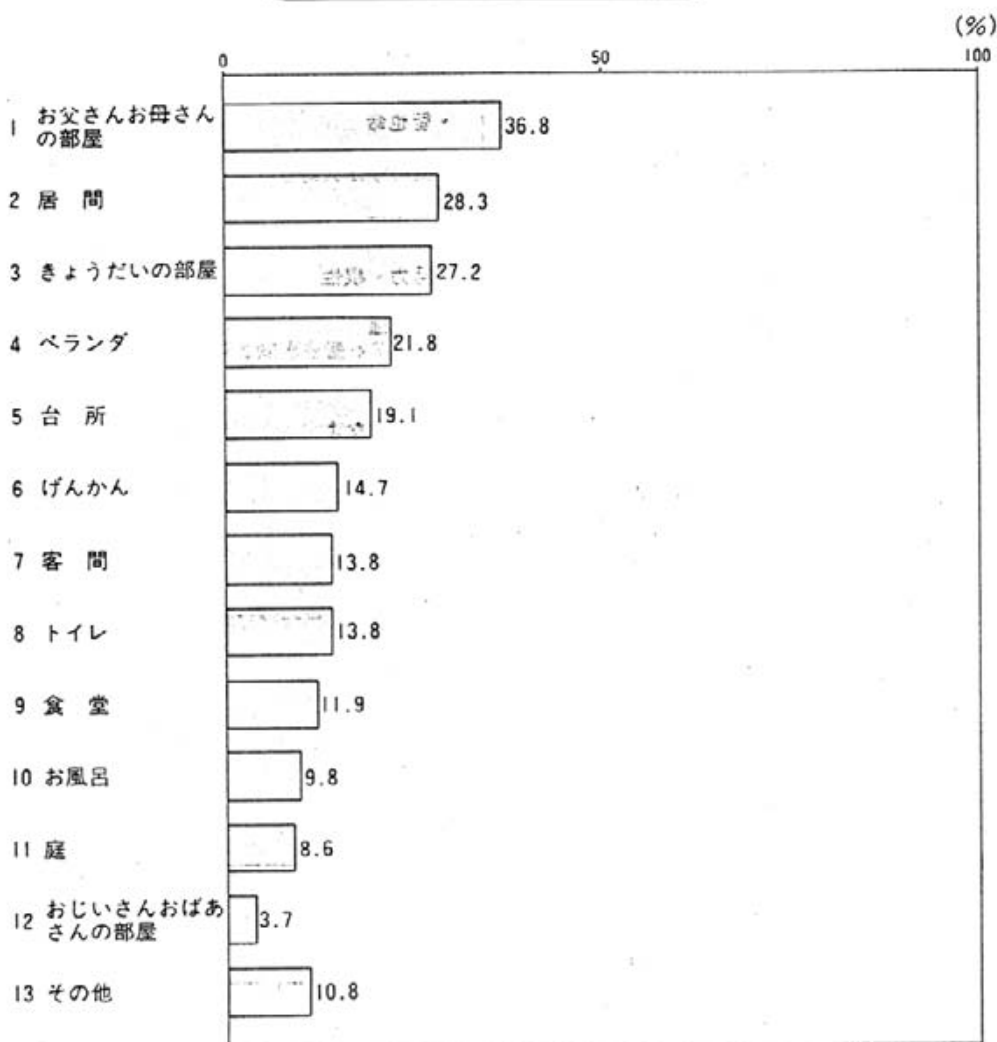
図20は、子ども部屋のとなりがどんな部屋かをまとめたものだ。お父さんお母さんの寝室37%、居間28%、きょうだいの部屋27%。子ども部屋は、やはり、人の出入りの多い部屋のとなりに置かれていることがわかる。

それでは、部屋のカギはどうなのか。図21

で、「かかる」と答えた子どもは、全体の約2割。子ども部屋にはカギをつけないのが一般的なスタイルのようである。

つぎの図22は、では、子どもたちのほうで部屋にカギをつけてほしいと思っているかどうか、聞いた結果である。「ぜひあったほうがいい」と「できればあったほうがいい」を加えても、50%。この年齢では、子どもたちの個室に他からの侵入をこばむ構えは、それ

図20・となりはどんな部屋か



ほど強くないものようである。

では、部屋の中で勉強をしている時、子どもたちの耳にはどんな音が聞こえてくるのだろうか。図23は、「部屋の中にいる時、わりとよく聞こえてくる音」をたずねた結果である。

テレビの音71%、家の人話し声63%、食事の準備の音46%と、家の中の物音もさることながら、近所の子どもの遊ぶ声56%、電車や道路を通る車の音52%と、子ども部屋にはけっこう多くの物音が聞こえてきている。子どもたちは、自分の部屋とはいっても、ある意味では社会的環境の中で暮らしているようだ。

しかし子どもたちは、この静かとはいえない部屋が気に入っているようで、図24に示すように、静かなのと少しもの音が聞こえてくるのとどちらが好きかをたずねてみると、全体として、「とても静かなほうが好き」が22%に対して、「少しもの音が聞こえるくらいのほうが好き」が63%、「ちょっとうるさいくらいのほうが好き」な子どもも15%もいる。

現代っ子たちは、少しもの音が聞こえるくらいの環境が好きなようである。

よく、テレビを見ながら、ラジオを聞きながら、勉強している子どもたちの姿を見る。おとなは「集中できないから」とこれを叱るが、逆に子どもたちの中には「音のある環境の下での安定」というメカニズムが、生まれてきているのかもしれない。

子ども部屋の環境を示すもう一つのデータとして、図25を見よう。窓を開けた時に、目に入る風景をたずねた結果である。「木や草の緑」が5割、「広い空」が4割と、子ども部屋の環境は思ったより悪くない。しかし「隣家の窓」「道路」「密集した家やビル」「へい」など、大都市環境に特有の風景も、そのうしろにずらりと並んでいる。苦勞して子ども部屋を与え、物質的環境としてはかなり十分なものを室内にとりそろえている親心も、周囲の環境までを買うことはできないといえそう。

図21・カギがかかるか

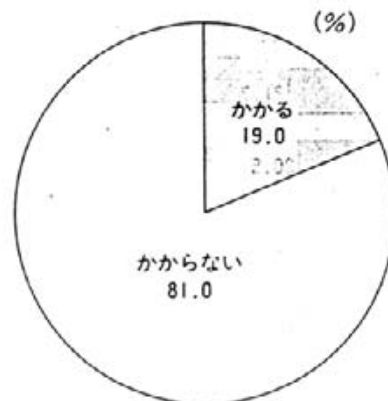


図22・カギがかかったほうがよいか

ぜひあった ほうがいい	できれば あったほうがいい	あまり いらない	ぜんぜん いらない (%)
24.7	24.8	26.6	23.9
49.5		50.5	

図23・わりとよく聞こえてくる音

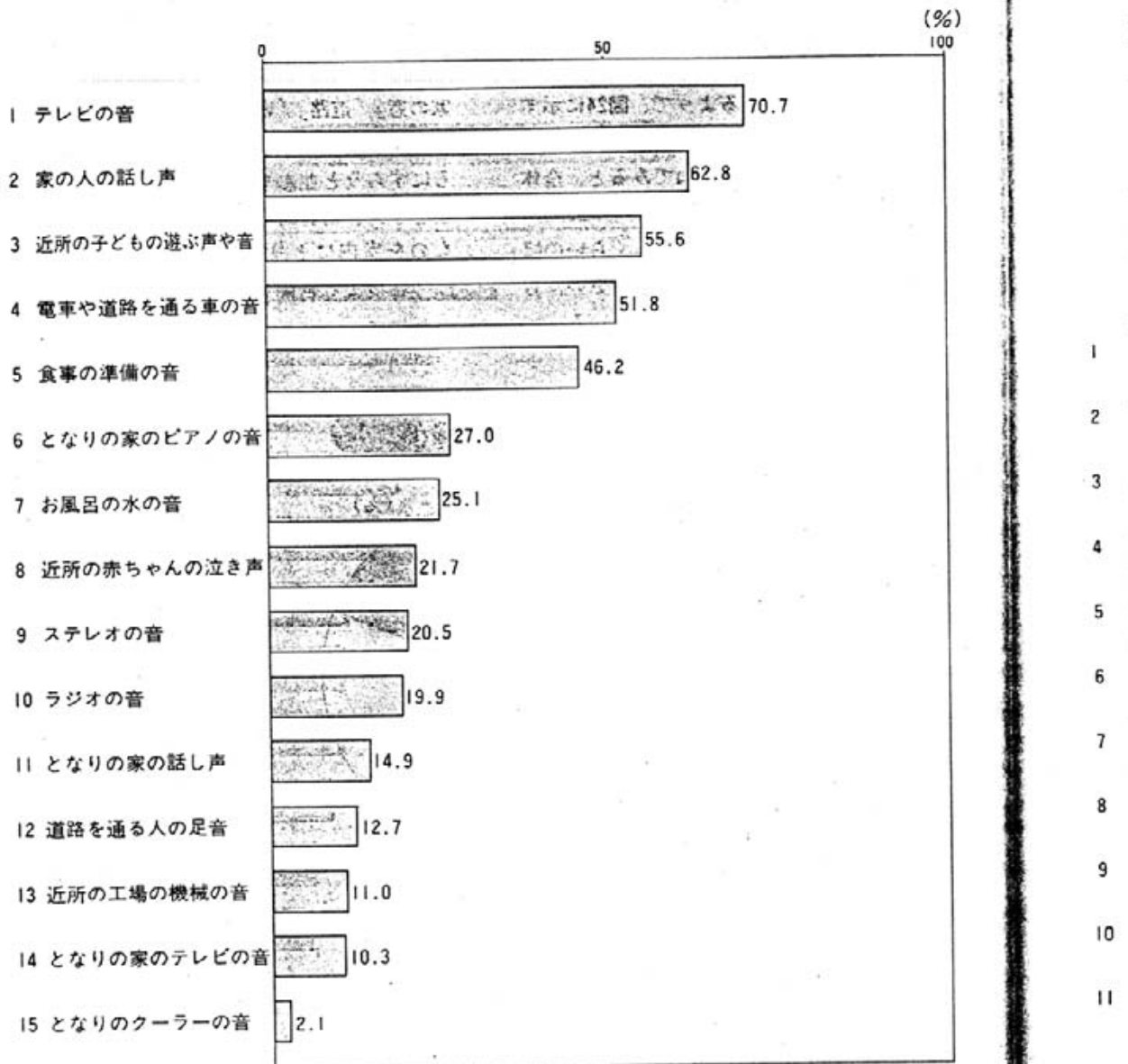


図24・とても静かなのと、少しもの音が聞こえてくるのとどちらのほうが好きか

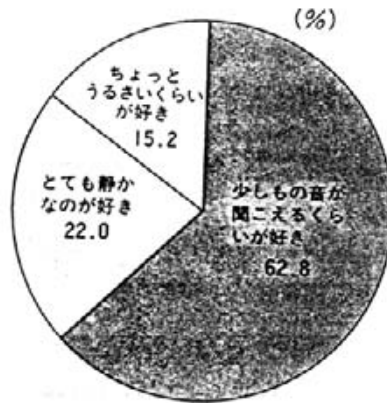


図25・窓を開けた時、すぐに目に入ってくるもの

